

退任記念講演

神異と習禪

— 『高僧伝』に見る中国仏教受容の一断面 —

平 井 俊 榮

(一)

今日は最終講義ということで最後のご挨拶でございますので、従来ですと皆さんこれまでの研究のまとめをお話になる例が多いようですが、先程も申しましたように、この十年は殆ど研究らしい研究もしないで、自分の研究を集成するということとして来なかつたものですから、一つも申し上げるようなこともないでございます。そうかといって、三十七年間の過去の仕事についての思い出を、お話しするのも、今更恥ずかしい、恥をさらすようなものだと思います、あれこれ悩んだのですが、最後でございますので、私の我が儘わがままを許していただきたいと思ひまして、このようなタイトルの『高僧伝』についてのお話をしてみたいと思つたわけでございます。

これは今岡部先生からお話しがありました、なぜ私がこの『高僧伝』というものを今日最終講義で皆さんにお話しす

るかと思つたかと申しますと、先程岡部先生がご紹介下さいましたが、これには又格別の思いがある訳でございます、丁度私は、一九七六年の頃ですか昭和五一年でございますが、在外研究を命じられました、カナダのブリティッシュコロンビア大学(UBC)に学んだことがございます。UBCには当時、先程もご紹介ありましたけれども、私と比較的専門領域に近い仏教学者が三人おりまして、お一人は創設者でもある、宗教学科の主任教授をしておりましたアーサー・リンク(Arthur Link)さん、この人はイギリスの貴族の方ですけれども、この方が南北朝時代の道教や仏教の専門家でございます、先程もお話しがございましたように、梁の慧皎の書きました『高僧伝』、今から一五〇〇年くらい前の梁代に慧皎という人が書いた高僧の伝記でございます、全一四巻の大著でございますが、それを英訳したと言うことで非常に有名な学者でありました。この方は英国の貴族でございます、大変な篤信家で飄々として仙人のような人でしたが、西バンクーバーの国立公園の

本当に素敵な景勝の地に家を建てておりました。それで教授会などには出ないのですが、学生は自宅に呼んで、講義をしたり演習をしたり、そういう悠々自適の人でした。この方が主任教授で一番古い方でした。

もう一人がレオン・ハービッツ (Leon Hurvitz) さんという方ですが、この方は日本の京都大学の人文研に留学いたしまして、京大で学位を取った方でありませう。『天台大師智顛の研究』でもって、日本の学位をおとりになった方です。シアトルの大学におられたのですが、私が行きますとちよつと前にアーサー・リンクさんに呼ばれて、UBCの教授になった方です。この方はまたジュライッシュですが、大変な語学の天才でございますして、英・獨・仏はもちろんでございますが、梵・把・藏、これにチャイニーズ・ジャパニーズ、それと蒙古語までできるといふ、九ヶ国語に堪能な大変な方だったといふことです。

このお二人の先生が中心になりました、その下に飯田昭太郎先生、この方は東北大学を出た方で、その後京都大学で長尾雅人さんについて京大の大学院にもおられた方です。京大の大学院をでられてから単身カナダに渡り、それからアメリカに行かれましたウイスコンシン大学のロビンソン教授にいた人です。"Early Mādhyamika"を書いたロビンソン教授です。このウイスコンシン大学というのはアメリカで一番初め

に仏教学のドクターコースのできた大学なんです。この大学でロビンソンさんから最初にPh.D.をもらった人です。この飯田昭太郎さんはPh.D.を取ってから、アーサー・リンクさんが『高僧伝』を英訳したということを知りまして、アーサー・リンクさんを慕ってUBC、ブリティッシュ・コロンビア大学に来てそこでそのまま採用されて助教授から教授になったという方だった訳です。この方は日本人でもありませんし、私は大変お世話になりました。お会いしてから直ちに十年の知己のような思いでありまして、ずいぶんお世話になった方です。この方のお世話でUBCとの姉妹校の提携も結ぶことができました、学生さんを英語のセミナーに毎年送り出すことができますようになりましたが、これもこの飯田昭太郎先生のお陰であります。

丁度私が行きましたときに、お三人の教授を中心にして大学院の学生さん達と一緒に、安澄、この人は日本の平安時代の三論学者であります、この安澄の書いた『中論疏記』というものを輪読しておったんですね。これは六家七宗と申しまして、当時の格義仏教、中国に初期に伝わりました般若学ですね、般若の空の研究というものをした本でございますが、その史料として安澄の書いた『中論疏記』というものを讀んでいたわけです。たまたま私の専門領域に近い、私にとっては極めてファミリーな書物だったものですから、むこうも

大変歓迎してくれまして、私もそのオブザーバーとして輪読会などに参加して、大変皆さんから歓迎されたことを覚えております。

そういう状況だったものですから、ある時アーサー・リンクさんがカクテルパーティーを主宰いたしましたして、大学の先生方と一緒に私も招待してくれた訳です。丁度夏の七月の頃でしたが、アーサー・リンクさんのお宅に伺って、たくさんの先生達と、私は英語ができませんので飯田昭太郎さんの通訳でもってお話したのですが、その時にアーサー・リンクさんが私に見せてくれたのがこの本です。リンクさんの手書きの原稿、草稿なわけです。これが三冊ございました。そして、これにまだワープロとパソコンのない時代でありますので、ご自分でタイプで打たれた、そして、経典の名前だとか、或いは人名を漢文でもって、いちいち細かく書かれたものをみせていただいたわけですが、そういう大変高名な学者の生の原稿を拝見するということが初めてだったもので、そういういろんな条件がそろった中で、飯田昭太郎先生とアーサー・リンクさんと三人で、長いことリンクさんの『高僧伝』の草稿をみせていただいた訳であります。その時はまさかこの本が、私と深い関わりを持つなんていうことは予想だにしていなかった訳でして、一日も早い公刊を期待しております、と言って帰ってきたわけです。

たまたま、先程もお話いたしましたが一九八一年ですね、昭和五六年でございますが五年経ったときにこのアーサー・リンクさんが突然亡くなられたわけです。これは後で聞きましたところでは、台風の時に屋根に登って修理をしていたところ、たまたま突風に煽られて転落して、即死するとうような、大変痛ましい事故に遭われて亡くなられたわけです。従いまして教授自身の手によって、この『高僧伝』が公刊されるという機会は永遠に失われた訳です。

しかし、飯田昭太郎先生は、先程も申しましたように『高僧伝』を機縁としてリンクさん、ないしはBCOとの関係を持たれた方でございますので、飯田昭太郎先生が、このリンク教授の遺志を果たすべくその遺稿の整理に着手されたわけでございます。ところが子細に見てみますと、リンクさんの残された原稿というのは、『高僧伝』本文の英訳というのは確かに完成して全訳されているわけですが、脚注が、注記がですね、ないという形です。そのままでは学術書として公刊することができないということが判明したわけでありまして。このままではせっかくの英訳というものも、十全な形では公刊することができないと言うことがわかったわけです。

そのようなおりに一九八四年になりますか、昭和五九年の五月に、新渡戸稲造・大平正芳記念国際学会というのがBCO

で開かれ、この学会に私も招待されたのであります。これはどういうことかと申しますと、飯田昭太郎先生というのは大変な熱血漢でございまして、ものすごい実行力に富んだ方なのですが、先生は大阪の万博の時に、三洋電機のパビリオンの屋根というのが日本の心と名付けられた見事な建物であつたらしいのですが、その建物を見てですね、屋根をカナダのブリティッシュコロンビア大学に移して欲しいんだと、そして、日本とカナダを結ぶ太平洋の架け橋になるようなアジア会館といえますかアジアセンターを作りたいというので、是非その屋根をくれと行って、果敢に一人で、三洋電機の重役達に談判し、お願いしたというのです。その後紆余曲折がありましたけれども、日本の経団連だとか、日本政府も援助したという風に聞いておりますが、カナダ政府やブリティッシュコロンビア州の寄付をもってですね、途中ずいぶん年月は経ちましたが、アジアセンターと言うものをUBCのキャンパスの中に立てたわけです。地下三階地上三階の非常に立派な建物、まさに三洋電機の日本の心と名付けられた屋根をうつして建造されたものなんですね。その落成式を記念して、関係の深い新渡戸稲造、それから恐らく大平さんの時代に日本から援助がきたということで、大平正芳さんも選挙の途中で現職の総理のまま亡くなられたわけですが、それを記念する国際記念学会というのが行われまして、これが一九八四年で

ございますが、その学会に私も招待されました、研究発表等をしたのであります。その時飯田昭太郎さんから、何とかこのアーサー・リンクさんの遺稿である『高僧伝』の英訳を世に出したいというご相談を受けたのです。

しかし、実は原稿には注記が全く欠けているのだと、そこで新たに注記を付すということは、カナダやアメリカの学者では到底手が出ないので、日本の学者にお願いしたいと思つて、しばしば毎年のように日本を訪れて、各大学に行つてお願いしているんだけど、誰も引き受けてくれる者がいないのだと。そして最後に、おまえがこれをやってくれないか、と言われたわけです。

私は到底できませんよと言つたわけですが、そういう因縁がありました、国際記念学会にも招待されたということもあつたもので、考えさせてくれと言って帰ってきたわけです。その時は学会でございまして飯田先生も大変お忙しくされていらつしやつたので、話はそこまで帰ってきたのですが。その後、一九八六年になりました、私が丁度副学長になった初めての仕事として、本学とUBCとの姉妹校の提携を結んだ訳です。その時には、当時の学長の桜井徳太郎先生が調印をなさるために出向かれたわけですが、経営学部の近藤先生が国際交流委員会の委員長でしたので、近藤先生が行かれたり、あとは今の事務局長の田邊祖光さんとか、辞められた人事部

長の花岡さんなんかが随行していったんだと思います。

こういうことがありまして、本学とJBCとの間で姉妹校提携の協定が結ばれるにいたりまして、そこでにわかになんかそれを契機にして、私と飯田先生、JBCとのあいだで、岡部先生のご説明がありましたような、『高僧伝』の研究ということをご共同でやるうではないかという話が持ち上ったのであります。たまたま私の大学院の演習ゼミには大変優秀な学生さんが大勢来て下さっていたものですから、私は今副学長で、とても忙しくて直接自分ではできないけれども、学生さん達が優秀だから必ずこれはできるのだから、それで良いなら引き受けましょう、ということ、国際共同研究ということで、基本的に同意したわけです。

その作業の一つは、アーサー・リンクさんの残された原稿に対する注記を日本語で書いて、それを飯田先生に送って、先程申し上げました、レオン・ハービッツ先生がそれを英訳する。そして最終的にある程度の巻数がまとまったらカリフォルニア大バークレー校のランカスター教授、あの頃チェアマンをしておったのですが、ランカスターさんによってカリフォルニア大の出版局から出版するという段取りになったのであります。その後順調にその作業は進みまして、私は直接関与しないで、専ら監修という立場で接するだけでございましたけれども、仕事を進めまして、二巻まで終わったところ

でしたかな、原稿を送りましたところ、むこうでは非常に喜んで、ゼミの学生さんと私を含めて数名を航空運賃から滞在費まで、全てむこうのジャパンフアンデーションの基金を使いまして招待されたということもあつたわけです。

ゼミの自費でもって、海外旅行するということはあろうかと思いますが、海外の大学から、ゼミ生全員が招待をされるということは余りないことではないかと思うわけでありまして、とにかく楽しい旅行だったということ覚えております。

そのように、仕事は順調に進んでおったのですが、たまたま飯田昭太郎先生が平成六年だったでしょうか、三巻が終わって、第一分冊を公刊するという時に、こちらから今度は自費でもって、JBCを訪れようと計画をしていたとき、ガンで倒れたと言うことをきました。それで結局この研究は飯田先生あつての研究でございましたから、断念せざるをえないという状況に追い込まれたわけでございます。大変残念でありましたけれども、せつかく『高僧伝』の国際共同研究ということで進めて参ったのですが、残念なことに途中で中断・挫折せざるをえない状況になりました。

ただ、私の手元には、この三冊のアーサー・リンク先生の原稿が残されたのですが、これは行き場がないのですね。先程も申し上げましたようにアーサー・リンクさんはずっと結

婚しないので一人でしたので、遠縁の方が遺産などは相続されたのだろうと思いますが、その方はビジネスマンでありまして全く学問に対しては興味が無い、蔵書とか全部処分してしまつて、イギリスに帰られたということ聞いています。この『高僧伝』の遺稿草稿も良いようにしてくれと言つて、飯田先生に渡して行かれたということです。この『高僧伝』の研究、注記の作成の時にはですね、先生は、自分はコピーで良いからお前がこれを持っていてくれ、といつて、これを三冊、重たいものでありますが、自分でリュックに背負つて、太平洋を渡つて持つてきてくれたわけです。丁度、私が副学長の年の冬でしたが、寒いにもかかわらず成田から直行して私の部屋にこれを届けてくれたわけです。

今、これを私が三冊預かっている訳ですが、アーサー・リンクさん、飯田昭太郎先生の遺志をですね、受け継いでこれを完成することなく、この草稿を預かっているというのは何とも心苦しく思っていたのですが、『高僧伝』の研究は結局私の最後の研究課題にもなつた訳でありますし、そういうことで、『高僧伝』についてこの最終講義で申し上げたら、いくらかでもアーサー・リンクさんや飯田昭太郎先生の霊を慰める事ができるのではないかと、そう思ひまして、敢えて特殊なタイトルでございますが、『高僧伝』の一つの考察というものを申し上げて、それを最終講義の代りにさせていただきます

きたいと思ひます。あるいは皆さんのご期待に背くかもしれませんが、そういう事情や因縁がございましたので、敢えて、こういうテーマでもつてお話しすることをお許し願ひたいと思ひます。

(二)

『高僧伝』と申しますのは、中国に仏教が初めて伝えられたとされる、後漢の永平一〇年（六七年）から、梁の天監一八年、五一九年に至るまでの四五三年間に活躍した高僧の事跡を記録したものであり、本伝のある者二五七人、この他傍出の附伝として二四三人の伝記が収められております。本書は全部で一四巻よりなっておりますが、実質的な伝記部分というのは一三巻で、著者である慧皎はこれをそれぞれの徳業によつて、十科に分けております。

まず、十科の第一は訳経編ですが、この訳経編というのは仏典の漢訳に功績のあつた坊さん達の伝記でございます。二番目の義解編というのは、教理研究の発展に尽くした僧の記録でございます。三番目に神異とございますが、これが今日のタイトルでございますけれども、不可思議な靈験によつて人々を教化したお坊さん達の伝記でございます。それから四番目の習禪編というのは専ら禪定の修行に従事したお坊さん達の伝記であります。それから五番目に明律編というのは持

戒が堅固であつて、戒律に通じているお坊さん達でございませぬ。更に身命を捨てて衆生を救ひ法に殉じた僧を六番目の亡身編に、七番目に經の諷誦によつて功を修めた僧たちを誦經編に、八番目に像塔の建立とか修復に勤めた僧を興福編に挙げております。九番目が梵唄によつて、人々の教導に勤めた僧たちを収めたもので、これを經師編といいます。十番目に説法に長じた坊さんの伝記を唱道に、それぞれ配当してその事跡を顕彰しているわけでございますが、のちに唐の道宣が『続高僧伝』三〇卷を著しましたし、宋の贊寧が『宋高僧伝』三〇卷、明の如惺は『大明高僧伝』八卷を編纂いたしました。が、この十科の分類を含めてその全てが本書に倣つて編纂されたものです。まさに本書は後の僧伝の原形となつた最初の史伝の書であると言ふことができます。

ところで著者の慧皎は本書を『高僧伝』と称する理由について、自序の中で、「前代より撰する所、多くは名僧と曰う。然るに名は本と実の竇なり。若し実行するも光を潜むれば、則ち高くして名あらず。寡徳も時に適えば、則ち名ありて高からず。名ありて高からざれば、本より紀する所にあらず。高くして名あざれば、則ち今の録に備う。故に「名」の音を省きて、代うるに「高」の字を以てせり」（大正蔵五〇・四一九上）と言つております。これは従来の僧伝が、名僧といわれる人々に着目されていたのに対し、慧皎自身はたとえ名

声があつても、徳が少なければこれを記さず、逆に無名の者であつても、高德の者は積極的に収録したことを明言したものであります。このような慧皎の姿勢には本書に先行すると数年前に完成していた、宝唱という人の『名僧伝』三〇卷、今これはなくなつておりますが、欠本でございませぬが、この『名僧伝』に対する強い対抗意識があつたことは想像に難くありません。

ところでこの、名僧ではなくて、高僧を記録したという、慧皎のいういわゆる高德の僧と寡徳の僧を慧皎はどのようにして判別したのか、今となつては知る由もありませんが、無名であつても高德の者は積極的に収録したという編集方針には、あるイメージをもとにして、それに適つた高僧の隠れた事跡を発掘しようとする意図があつたように思われます。今、『高僧伝』の十科の分類の第三に、訳經編や義解編に続いて、神異という一科を設けて、不思議な力を持ち靈驗を表した僧を列記していることにもその意図の一端を窺ふことができます。かと思ひます。

外来の宗教である仏教が中国の社会に受容され固有の文化の中に定着してゆく為にはインド伝来の仏典を伝訳した訳經僧や、漢訳された仏典を研究講説した義解僧の功績は大なるものがあり、多大な成果を収めたことは言うまでもありませんが、仏教が底辺の民衆にまで浸透し中国社会のあらゆる階

層に深く定着していったのには、むしろ神異の僧たちの行う道術や靈験の話が、最もあずかつて力があつたのではないかと思われまゝ。

そもそも世界のどの宗教においても、奇蹟や奇瑞という事象が人々をその宗教に引き入れる大きな力となつてゐることは疑いのないことでしょう。仏教においてもこのことは例外ではなく仏陀の時代から多くの經典に仏の奇瑞が説かれ、奇蹟が示されて、それが人々の仏教への帰依の対象となつたことは確かであります。中国に仏教が伝来した最初期にも、こうした奇瑞が大きな力となつたということは、後漢の明帝が夢に金人を見たことが仏教受容の一大契機になつた、という伝説にも明らかでありますし、その後の仏教の中国化、大衆化にも大きな影響を与えてゐるということも確かであります。

ただ一般に仏典では、こうした奇蹟や奇瑞というのは、神異ではなくて神通という言葉で表されております。では、その神異と神通はどう違うかといへば隋代の淨影寺慧遠という人が、その著『大乘義章』の中で、「神通とは、能について名を彰らかにせば、為す所の神異は之れを目づけて神と為し、作用の壅がること無きを之れを謂いて通と為すなり」（巻第二十、大正藏四四・八五五中）といつております。つまり慧遠は、神通力によつて表された不可思議な事象、それが神異でござ

いますね、その神異が神通の神に当たり、その働きが自由自在であることが神通の通の意味であるといつてゐるのですから、これによれば神異の内容とする範囲は神通よりも狭いということになります。にもかかわらず慧皎は編名を神通としないで神異としたのは、恐らく神通の概念が、六神通や五通十通のように伝統的にあまりにも明確にされてゐることもあつて、この神通には含み得ないけれども、それに類する不可思議な事象全てを収録しようとして、それほど概念の明確ではない、神異という言葉を採用したものと思われまゝ。

道宣の『続高僧伝』や、贊寧の『宋高僧伝』では、この神異が感通に変わつておりますが、識者に依ればこの感通も神異と同様にこの意味するところが神通ほど明確ではなく、道宣が神通ではなく感通を編名にしたということも、慧皎の場合と同様に考えられるといつております。神異と感通とを比較すると、神異はあくまで人間の能力の及ばない不可思議を意味するのに引き替えて、感通は感じてついに通ずるというのでありますから、幾分人間の能力に信をおく態度が含まれてゐるといふ点で、感通は神通と神異の中間的表現であるとも言えますが、いずれにしても人間の通常の作為を持つてしては、いかんともすることのできない不可思議靈妙な事象であることに代わりはなく、正統的な仏教の立場からすれば神異や感通という中国的表現のそれぞれの語を以て表そうと

したものの中核を為しているのが神通であるということがわかるかと思えます。

(三)

ところで仏教において神通は衆生教化の方便として重視されるものであります。例えば『維摩詰所説経』の觀衆生品に、ある天女が過去九十二億の仏を供養したことを称えて、「能く菩薩の神通に遊戲し、所願具足し無生忍を得て不退転に住す。本願を以ての故に意に随いて能く現じて衆生を教化す」(大正蔵一四・五四八下)と説かれております。神通に対するこうした考え方は三つの『高僧伝』の神異觀や感通觀とも呼応するもので、贊寧は『宋高僧伝』の序に感通について、「常理に逆らうも感じて遂に通ず。世間を化するも、これを觀れば測り難し」(大正蔵五〇・七一〇上)と言っています。

ところでこの神通力、ないし神異感通と習禅との関係はどうかと申しますと、神通力は原始仏教の時代から、持戒及び禅定の徳に由来するものと考えられて参りました。特に禅定はその直接的な縁由として重んぜられ、慧皎も「六通は禅に由って起こる」と直言しております。即ち、習禅編の末尾に付した総論で、「是の如く禅定の力を以て智慧の葉を服し、其の力を得已りて還って衆生を化す。是を以て四等六通は禅に由って起こり、八除十入は定方に藉りて成る。故に知る、

禅定の用為る、大なる哉」(大正蔵五〇・四〇〇中)と言っております。又この禅定と、神通・神異との関係については、「然れば禅用頭を為して、属して神通に在り。故に三千をして毛孔に宅し、四海をして結びて凝蘇と為し、石壁を過ぎて壅ぐことなく、大衆を擎^おぎて遺^{のこ}さざらしむ」(大正蔵五〇・四〇〇下)と言っております。即ち禅定の働きが頭わになった時には、それに付随して神通が起こり、三千大千世界を一毛孔の中に現する等の神異を現じて、大衆を教化するのだと、言っております。つまり、神異はインド仏教以来徹底した禅定と持戒の実践によつて可能となる神通力であつて、だからこそ慧皎は神異編の後に習禅編において、習禅と神異との密接な関係を強調したものと思われまゝです。事実慧皎は神異僧の多くのものは禅を習し、習禅者の多数が神異を現じたことを記録しています。

禅定は仏教では、戒定慧の三学という仏道修行体系の中核を為すもので、習禅の実践家を高僧として記録したのは当然であるとして、慧皎が、特に教化の方便に過ぎない道術まがいの奇怪な神異という一科を設けて、神異僧の事跡を記録したのは彼自身神異に対する高い評価があつたからだと思われ、また習禅と一体となつた神異という実践仏教に対する彼なりの評価があつたからだろうと思われまゝです。

こうした慧皎の実践仏教に対する高い評価は『高僧伝』の

中に随所に窺われますが、例えば神異編の最後に、保誌という人の伝が載っております。この保誌は若いとき禪を修行したが、長じては不思議な所行が目立つようになったといわれ、一時は民衆を惑わす者として、斉の武帝に収監された人であります。しかし、不思議な靈験を現じたり分身の術を現わし、数々の予言を行うなど、天衣無縫にして伝説の謎に包まれた怪僧であったが為に、後に梁の武帝によって厚遇された人物であります。慧皎はこの保誌が、当時梁の三大法師とされた、義解の権威者である光宅寺法雲と問答したエピソードを伝えております。即ち、華林殿で、法雲が其の最も得意とする法華経を唱えていたとき、この光宅寺法雲には『法華義記』という大著がございまして、これは現在残っております。

日本の聖徳太子が『三経義疏』を著した訳ですが、この『三経義疏』の一つである、聖徳太子の『法華義疏』というのはこの光宅寺法雲の『法華義記』を下敷きにして書かれたものであります。それほど法華経の学者であったわけですから、この法雲が法華経を講じていたときに普門品の「たとえ舟が黒風に襲われて漂流したときでも、観音菩薩の名を称えろと難を免れることができる」というくだりまで来たときに、突然保誌は風の有無を問うたというのです。すると法雲は「世俗諦のゆえに有といい、第一義諦においては無である」と答えました。保誌は更に前後三、四回問答を重ねた末に「もしその実

体が仮有であるというのなら、これ又不可解にして難解な沙汰だ」と言って笑ったといえます。慧皎はこのように保誌のいう言動はいつも晦渋で訳が分からない事を言っていたと評しています。（大正蔵五〇・二二九四下）このように慧皎は、怪異な神異の僧保誌を、当代きつての義解僧である法雲と対峙させ、法雲をして顔色なからしめるまで嘲笑させているところにも、彼の実践的な仏教者に対する並々ならぬ思い入れというものを看取することができるかと思えます。

（四）

同時にこの慧皎は神異編の論曰のところ、「理の貴ぶところのものは道に合するからであり、事の貴ぶところのものは物を濟うことにあり」（大正蔵五〇・三九五上）と言っておりますから、神異という事象があくまでも衆生を教化するための方便に過ぎないという事も、十分自覚していたと思われるます。にもかかわらずこの神異に対して高い関心を寄せ、実践的な仏教に対して積極的な評価を与えているという事は、一面において慧皎が、仏教が底辺の民衆にまで受容されていく過程にあつて、当時の民衆が仏教に期待したものを敏感に感じ取っていて、其の意向を忠実に代弁しようとしたからではないかと思ふのであります。

例えば『高僧伝』よりやや成立が遅れますが、ほぼ同時代

の北魏の末期に在俗の太守楊銜之によって著されました『洛陽伽藍記』の崇真寺の項には、当時の僧侶を品評し格付けした次のような説話が載っております。

それは崇真寺の惠凝という比丘が亡くなって七日目に仮死状態から蘇生したときに、閻魔王庁で見聞したという、裁判物語であります。即ち、この惠凝は五人の比丘が閻魔王の裁きをうけている次のような場面に際会したというのであります。

(1) 第一に宝明寺の智聖という人は坐禪苦行をしたという事で、天堂・極楽に登ることを許された。

(2) 二番目に般若寺の道品というお坊さんは四十巻本の涅槃経を誦したという功績で、同じく天堂に登ることを許された。

(3) 三番目に融覚寺の曇謨最という人は、この人は涅槃経と華嚴経の講者として洛陽随一の評判があつた学者であります。閻魔王が講経の者は心に彼我の分別をいだし、他を凌がんとする振る舞いであり、比丘中の第一の鹿行、荒つぽい行ということですが、鹿行であるとして、試みに坐禪・誦経せよ、講経などは問題ではないと非難したところ、曇謨最は私は講経のみ好み、暗誦をしたことがないと答えたため閻魔王は役人に言い渡し、青衣を来た十人をもつて

西北の門に向かわしめた。建物は黒色で、好処、好いところでは無いようであつた。地獄を暗示しているわけでございます。

(4) 四番目の禅林寺の道弘という人は一切経や等身大の金の仏像十体を作つたという人であるが、閻魔王は沙門の本質は必ず心を修めて道を守り、その志すところは坐禪や誦経であり、俗世のことを求めず、うたかたのことを為さないものである。たとえ経像を造つても他人の財物を得たいが為に他ならず、すでに財物を得てしまうと貪りの心が起る。貪りの心が起こつてしまうと、もはや貪欲・瞋恚・愚痴の三毒が無くならないで煩惱が具足するというものだとして、役人に言いつけて曇謨最と同じように黒い門に入つて行かせたというのであります。

(5) 五番目に靈覚寺の宝明というお坊さんは、私は出家する以前は隴西の太守であつて、靈覚寺を造営し、寺が竣工してから官を捨て、仏門に入ったので、坐禪・誦経はしないが礼拝は欠かしたことがないと告白したところ、閻魔王はおまえが大守であつた時は道理を曲げ、法を曲げ、民の財産を掠め取つたのだ、たとえ靈覚寺を造つたのだとしてもお前の力でないことは今更言うまでもないことだとして、これ

もまた役人に言いつけ、青衣が宝明を連れて黒い門に入ってしまったということでございます。

この仮死状態から生還した惠凝の語る五人の僧のことを聞いた太后は役人を使わして、以上の寺に関して調べさせたところ、これらは、それぞれ実在の僧であったことから事の真実に驚き、その後、都の比丘は坐禪・誦經を事として、もはや講經のことは問題にしなくなったというのであります。

（卷第二、大正蔵五一・一〇〇五中下）

『洛陽伽藍記』のこの説話は頗る荒唐無稽な話のようにも思われますが、反面、講經口舌の僧はもはや重要視されず、坐禪・誦經の僧こそが僧侶として望ましい者であり、僧侶にしていたずらに自らの尊大を誇ったり、広く布施を求め、みだりに經像を造作することの愚を説いたものとして、当時の知識人の期待する僧侶像が描きだされていると見ることもできます。『洛陽伽藍記』のこの説話は、これより先に成立した『高僧伝』にはもちろん取り上げられることは無かったのであります。当時の、風潮や時代相がどのようなものであり、民衆の期待するところがどの辺にあつたのかは十分に窺い知ることができるとおもいます。つまり、慧皎が神異僧や、習禪者といった、教化や実践の面で活躍した僧たちに格別の関心を寄せ、高い評価を与えているのもこうした時代相を反映し、仏教や僧侶に対する民衆の期待というものを代弁しよ

うとする意図があつたからだと思ふのであります。

（五）

更に『高僧伝』の編集に見られるもう一つの特徴は、慧皎自身は、「諸僧を傍出してその風素ひととなりを叙べているが、みな附見であり、はなはだ疎闕多し」（大正蔵五〇・四一八下）といつて、あまり参考にならなかつたと称しているものの、南北朝時代に流行した、『宣驗記』とか『冥祥記』といった、いわゆる「応報記」の類をよく参照し、そこに説かれた因果応報などの説話を、数多く収録していることでもあります。これはこうした説話集や靈驗記の中に、魏晋南北朝の民衆の神靈信仰というものがよく現されていて、それが、初期の中国の仏教受容に対して、大きな力となつていたと感じ取つていた証左であろうかと思ひます。

たとえば巻第一の訳經編にある、康僧会の伝には、呉の君主孫皓の次のような逸話が載っています。即ち孫皓は道理の通じない粗暴な性格であつたが、ある時孫皓が兵士達に後宮の園林の整備をさせていたとき、たまたま地中から高さ数尺の金銅の仏像が見つかつたというんですね。これを兵士達が孫皓に呈上したところ、其の仏像を厠に置き、尿をかけて、臣下たちと笑つて楽しんでたうんです。ところが、間もなく全身が腫れ上がり、陰部がとりわけ痛むので、辺り構わず

絶叫し苦痛のあまり死を求めるといふ有様であったといひます。占い師によれば大神を犯した報いであるといふことだったので、あちこちの廟で祈祷をしたがなかなか治らなかつた。たまたま以前から仏法を信奉していた側室の女性が、仏像を殿上に安置して、香湯をもつて数十回洗い、焼香して懺悔した。孫皓は何度も、枕に頭を打ち付け自分の罪状を述べたところ、しばらくして痛みが収まってきたので、直ちに使いを寺に遣わして、康僧会に説法を請い求め、宮中に招じて五戒を受けた。すると旬日にして病は治つた。そこで、孫皓は康僧会の住んでいる寺を更に増広莊嚴し、王室の人々に伝えて、必ず仏法を信奉させることにしたと云うのであります。

この話は『世説新語』の著者でもありません、宋の劉義慶が撰述した『宣驗記』や『幽明録』にその原形が見られるもので、この両書はすでに散逸しておりまして、『世説注』とか『法苑珠林』等の各所に散見するものを、近代に魯迅がまとめた、『古小説鈎沈』の中に大体を窺えるものでございます。両書とも書名から分かりますように、南北朝の中・末期に栄えた「応報記」の類であり、慧皎はこれらの書をすでに述べましたように、疎闕甚だ多しと批判しながらも、これを適宜に内容を改め、文辞を修飾して採録しております。ということとは、これらの説話の中に記された僧侶達の行状や人々の真摯な仏教信仰のなかに、当時の中国社会の中に受容された、

初期中国仏教の本質というものを看取していたからに他ならないと思うのでございます。

慧皎は康僧会の伝において、この孫皓とのエピソードを記した後に、「康僧会は呉の時代にしばしば正法を説いたのだが、孫皓の性格が凶暴であるため、深い教えを説くまでに至らなかつた。ただ、因果応報の卑近な事柄を述べて、その心を開かせたのである」（大正蔵五〇・三二六上）と云つて、これが教化の方便、手段であつたことを強調しておりますが、この伝記の末尾には訳経の大学僧であつた康僧会自身の神異についても記しているところがあります。それは呉の天紀四年、二八〇年であります。四月に孫皓が晋朝に滅ぼされ、九月には康僧会も病を得て示寂したのでありますが、晋の咸和年間に蘇峻の乱によつて康僧会の建立した塔が焼かれてしまひ、何充という人によつて修復されたときに、趙誘という將軍があつて、一族で誰も仏教を信奉したものが無く、三宝を侮つておりましたが、この寺に入つて僧侶達に向かつて次のように言つたといふのであります。

「この塔はしばしば光明を放つと以前から聞いていたが、事実無根の嘘に相違ない。どうにも信じられない。もし、確かに自分の目で見たら議論の余地もないのだが」と言つたとたんに、その言葉が終わるやいなや塔は五色の光りを放ち、堂宇を明るく照らしたといひます。趙誘はぎくりとして身の

毛がよだったといひます。このことがあって、信仰心を起し、深く仏法に帰依して寺の東に更に小塔を建立したと伝えられております。慧皎はこの神異現象を、「これは遠くは仏陀の不思議な感応により、近くは康僧会の教化の力によるものである」（大正蔵五〇・三三六中）と述べております。

このように『高僧伝』の中には神異編に限らず、康僧会のように、訳経僧や義解僧の中にも数多くの神異を現じた僧達の記録がみられ、それは十科の各編に渡り万遍なく読み取れるのであります。田中敬信さんという学者は、「梁高僧伝における神異について」という論文を発表され、『高僧伝』の本伝として収録された、高僧二五七名中、神異事項が読みとれる人数は実に一四一名にも上り、高僧全体の過半数を超えろと言っております。更に是を習禪との関係について見てみますと、神異を現じたもの一四一名中八九名のもが何らかの形で習禪と関係しており、そのかずは六割を超えろと言っております。また遷化するにあたって、其の予言や遷化の前後において神異を現じたものは、神異を現じた僧の中の四割弱、三七%にもなり、比較的遷化の前後において神異の現象を現じた者が多いことを現しております。

これを田中氏は各科にわたって一覧表にして提示してありますが、田中氏に依れば、神異編、これはもちろん一〇〇%でございます。二〇名の伝記のうち、神異を現じたのが二〇名

であります。ですから神異編の一〇〇%は当たり前として、比較的高い割合で神異者が出ているのが習禪編でこれが八%ですね。これはすでに禪に關係がある、これは習禪編ですから、一七名のうち、神異を現じたのが一七名、これも当たり前です。遷化前後の神異も割合からすれば、習禪編が一番多く見られ、七一%に達しております。亡身編も、禪と遷化に關する割合が高いのが特徴であります。これは六七%。興福編というのは、神異編以外ではここでの神異者が最高の割合を示しております。これは九三%となっております。これは大部分の者が造仏や造塔等の福德の果報として神異現象が見られることを強調しているためで、そのために習禪編や亡身編とは逆に、習禪や遷化の時の神異との関連は薄いことがわかります。一方、高僧の中で、神異者の占める割合の低いのは、義解編と明律編、それに経師編と唱導編の四科であります。このうち義解編では神異者の割合、是は学者でありますから、神異者の割合は低いのですが、二八%しかありません。しかしその神異を現じた僧達の中で習禪と關係のある者の割合は他の科に比べても高く七一%になっております。また遷化前後の神異現象も比較的多いことがわかります。四〇%弱であります。また、明律編は神異ということでは最低の科であります。これは律の研究に關する面が強く出ているためと、また持律持戒という、修道者として最も根本的な純粹性

を強調するため、かえって神異という、どちらかと言えば泥臭い現象を示し得なかつたためと考えられます。最後の経師編と唱導編の二編は、それぞれの伝統が新しく、『高僧伝』の編纂された時までには時間が経過していないこともあって、内容的にも不十分で、神異事項もそれに伴って少ないということが田中先生により指摘されております。

いずれにしてもこの神異という現象は、神異編の一科に留まらず、『高僧伝』全体に広がっていることがわかります。しかも、収録された高僧の過半数にこれを指摘することができますのであります。即ちこれは慧皎が、たとえ神異現象の全てを容認していたのではなく、単なる素材として収録したに過ぎないものであったとしても、神異ということが慧皎にとつて『高僧伝』編集の重要なモチーフであったことを示しているといえます。そこで、次に特に密接な関係のある神異編と習禅編を中心にしてこの両者に共通してみられる具体的な神異現象について、その実態を見てみたいと思います。

(六)

まず、両者に共通してみられる修行として、極めて基本的な現象に絶穀・蔬食という食事法や、それに伴う、長生きのことがございます。例えば神異編にある単道開という人は、穀類を絶つて柏の実を食べていたといっています。後には小さい

石を服用していた。一度に数個、数日に一回の服用であった。時には生姜や山椒を少しばかり食べることもあった。このようにして七年の歳月を過ごす、寒さ熱さに煩わされることなく、冬も暖かく夏も涼しくて、又、昼も夜も横になることはなかったということです。後に後趙の石虎の信を得て、臨漳の昭徳寺に移り住んだが、僧坊の中に萱を編んで、十斛入りの箕くらいの広さの禅室を造り、いつもその中に坐っていた。こうした絶穀蔬食という修行方法は、不老長生を求める神仙道教的なものと同通った一面があることも確かで、時に道開のもとに神仙の術を求めるものが大勢訪れて質問した。彼はそれには全く答えず、次のような偈を説いてやつたと言われています。

「われ一切の苦を矜^{あわ}れみ、出家せるは世を利せんがためなり。世を利するに学明らかなるべし。学明らかなればよく悪を断たん。山遠くして糧粒^{かて}の難ければ、この断食の計を作すのみ、是れ仙侶を求めんとしてに非ず。幸^{ねが}くば相^あい伝説^{いふ}らすことなかれ」(大正蔵五〇・三八七中)といつて、道教的神仙家と一線を画する者であると明言しております。

道開は後に東晋の都建業に行きまして、更に南海(広東)に赴き、後に羅浮山に入つて、茅葺きの小屋に独居し、ひっそりと世間をよそに暮らしていたという。この羅浮山は早くから神仙道教の名山として聞こえた山で、道開が山中におる

と常に神仙が去来すると言われた。道開は、この山で享年百
余才で亡くなったと伝えられています。こうした絶穀蔬食と
いう修行は、習禪そのものが山中で行われることが多かった
だけに、道開の言うように山遠くして、食得難しという事情
もあって、習禪者にはかなり一般的に数多く見られることで
あります。例えば習禪編にある、竺僧頭の伝には「蔬食して
経を誦し、禪を業として務となす。常に山林に独处し、人外
に頭陀す。或る時は数日禪に入るも、亦た飢色なし」（大正蔵
五〇・三九五中）と伝えられています。

こうした事例は非常に多いのでありますが、絶穀蔬食の苦
行によってよく神異を現じ、人々を教化した顕著な例に釈曇
霍という人がおります。この人は蔬食し苦行して、いつも墓
地や木の下で暮らし神異を示して人々を教化した、といいま
す。当時五胡十六国の一つである鮮卑族の建国した南涼とい
う国があつて、この国の二代目の王の利鹿孤という人が西平、
今の青海に都を移して、自らを王と称して年号を建和といっ
たのですが、この建和二年、四〇一年の十一月に曇霍は河南
から西平に移ってきたのであります。

この利鹿孤に耨檀という弟がいた。この人は後に三代目の
南涼王になる人ですけれども、かれは独自の官僚と儀仗とを
備え、その権勢は国王を凌ぐほどであったといわれます。し
かし大変疑い深い性格から、多くの人々を殺害したので曇霍

は耨檀に向かつて、「善を修め仏道に従つて、後世の福德の
ために橋をお造りなさい」（大正蔵五〇・三八九下）と忠告し
た。すると耨檀は、「私は先祖代々天や地や山や河を敬つて
きた。（こういうところにも当時の民間信仰というものが察知でき
るわけですが）今にわかには仏を奉じたりすれば祖先の
心に背くことになる。もし、師が七日の間、食を断ち、顔色
が常の如くであるならば、それこそ仏道の精髓の現れとい
ものだから、私は喜んで帰信しましょう」と言ったという。
そこで、人に命じて曇霍を七日の間幽閉した。しかし曇霍に
は飢渴の様子は全く見られなかった。そこで、耨檀は内密に
智行という僧に曇霍に餅を持って行かせた。曇霍は、「わし
は一度も人を欺いたことがなかった、それなのに国王を欺け
というのか」と言った。これを聞いて耨檀は深く感服して、
曇霍を篤く敬い、これを機会に改心し、殺生をひかえ慈善を
行うようになった。国民はこうして曇霍に救われたので、み
んな大師と仰いで敬い、曇霍が街頭に出ると人々はこぞつて
礼拝したと慧皎は伝えております。

ここにも神異という靈験の力が、為政者をして改心せしめ、
それが又神秘的な奇瑞として人心を感動せしめ、人々を仏法
に帰依させる大きな力となっていることが知られ、初期の中
国仏教受容の典型を見ることができると思うのでありま
す。

(七)

又、習禪者が習禪する場所に注意して見てみますと、当時の習禪者はその多くの者が、深山幽谷に入つて、洞穴などを石室として、坐禪していたことがわかります。当然そういう場所は、猛獣の生息地でもあったことから、こうした猛獣を馴服した(馴らし従わせた)という神異が数多く伝えられています。

例えば竺仏調という人はある時一人で、深山に分け入つて習禪し、一年近くにもなつたが、五六升の干し飯を持っていっただけだったのに、帰つてきた時にはまだそれが余つていたという人であります。ある人がかつてこの竺仏調に随行して山に出かけていったとき、数十里も山奥に入ったところで日が暮れて、大雪に見舞われたといひます。そこで、竺仏調は虎の棲む石窟に入って泊まったといひます。ところが虎が還つてきて其の石窟の前に横たわつたので、竺仏調は、わしはお前の住処を奪つてしまったな、あいすまぬことだが、さでどうしたものかなと、虎に話しかけると、虎は耳を下げて山から下りていったということです。これを見て、随行した者はびっくり仰天したといひます。(大正蔵五〇・三二七下)

また、習禪者の竺曇猷という人は、石城山の石室で坐禪をしていたときに、数十匹の虎がうづくまって曇猷の前にすわ

つた。しかし曇猷は委細かまわず普段のように経を唱えていたところ、曇猷の前にいた虎が、一匹だけ眠つてしまった。そこで、曇猷は如意をもつて、虎の頭をこつんとたたいて、どうしてお前はお経を聞かないのかと問うた。すると虎達はにわかに皆群を為して立ち去つたと言うのであります。(大正蔵五〇・三九五下―三九六上)

こうした虎と習禪者との挿話が、神異の一現象として『高僧伝』の中には随所に見られます。それは「山沢に頭陀して虎兇を避けず」(巻第十一「釈法晤伝」、大正蔵五〇・三九九下)とか、「樹下に独り宿るも虎兇は傷つけず」(巻第十一「釈曇超伝」、同前・四〇〇上)というような極く簡潔な言葉で記録されることが多いのでありますが、その行間に習禪者がよく虎を馴服して危害を受けることがなかつたということを、特異な神異現象として受け止めていたことが読みとれるのであります。

(八)

更に、神異現象の極めて一般的な事例として神異の伝承の中には祈雨・雨乞いの話が数多く見られますが、例えば仏図澄という人は襄陽の水源が枯れたときに、安息香を焚き、数百言の呪文を唱えて、祈願して水を出さしめ、次の石虎の世に旱天が続いた時も、雨を祈つて豊年ならしめたので、仏法

を知らない夷狄も何も言わなくてもその神異に教化されたというのであります。（大正蔵五〇・三八三中〜三八七上）また、この雨乞いの話は、当時の龍神信仰と密接な関係があったと思われ、早魃ごとに龍を呪願して大雨を降らせ、農民を救ったというような話も多いのであります。

また慧皎は純粹な習禪者にも、民衆に請われて呪術まがいの神異を現じた僧があつたことを伝えております。それは例えば曇超という人があり、この人は錢塘の靈苑山に行つて習禪し、一度禪にはいると数日は坐を立つことはなかつたといわれる習禪者であります。ある時その地方の長官と思われの人がやつて来て、曇超を敬礼して次のようにいったとう。

富陽県の人間が冬にこの山の下を掘つた時に、誤つて龍の部屋を壊してしまつた。龍達は大いに怒つて、三百日の間雨を降らせないことに決めたという。今日ですでに百日以上も経っているのに一向に雨が降らず、井戸や池も枯れて田植えも長いことできないような状態です。あなたは夙に靈驗あらたかなお方であるとお聞きしておりますが、何卒私どものところへ来て、雨を降らせるように祈願していただけないかと懇願した。

曇超は雲を起こし、雨を降らせるのは本来あなた方檀越の力であり、愚僧のような者にどうしてそのようなことが出来

ましようか、と、一旦は断つたのであるが、重ねて、私どもはただ雲を興すことはできるが、雨を降らすことはできないのでお願いしているのですと、懇ろに請われたので、ついにこれを許し、その五日後に赤亭山という山に至つて、遙かに龍のために呪願説法したというのです。

すると夜になり、龍達が皆な人の姿に化けて曇超の所に詣つて礼拝した。曇超は更に説法を続けたところ、龍達は三帰戒を受けることを請い、自分たちが龍であることを告白した。そこで、曇超は、農民達が困つているのだから何とか雨を降らしてくれと請うたところ、龍達はお互いに顔を見合わせ、無言のまま立ち去つたという。しかし、その夜再び龍達は曇超の夢の中に現れて、私たちは元々怒りによつて三百日、雨を降らせまいという誓いを立てたのであるが、法師はすでに善行をもつて私たちを導いて下さつたのであるから、敢えてご命令に逆らうようなことはいたしません。明日の夕刻には必ず雨を降らせるでしょうと告げたという。

曇超は次の日の朝、臨泉寺に赴き、人を使わして県令に告げ、舟を河に浮かべて海龍王經を転読するようにと云つた。県令は早速僧達を請じ、舟を浮かべて、お經を転読してもらつたところ、転読が終わるや否や、大粒の雨が降つてきたという。民衆は上下等しく皆満足し、その年はまた大変な豊作であつたと伝えられております。（大正蔵五〇・四〇〇上〜中）

こうした、祈雨・雨乞いというような神異現象は、神仙家による呪術や中国古来の呪法にも見られるように、ごく一般的な事例であります。曇超の例に見られるように、民衆に是非にと請われて、雨を祈って、飢饉を免れしめるということとは、そのこと自体が宗教的実践として為された行為であつて、衆生済度の大願から出たものであります。『大智度論』に、「慈悲有るが故に衆生の為に神通を取り、諸の希有奇特の事を現わす」(卷第二十八、大正蔵二五・二六四中)とありますように、衆生済度の大慈悲心があるからこそ、希有・奇特のことが為されるわけで、曇超の場合、それが当時の龍神信仰と結びついて、適当に脚色された結果が、この挿話となつて世に喧伝されたものであらうと思ひます。

(九)

こうした希有奇特のことは神異編の中には数多く記されていて、文字どおり不可思議、神秘的な神靈現象として、取り上げられております。その一つに分身の術というのがございます。これは一人の人間が同時に何人にも分かれて作用する、という術であります。

例えば前述の、虎を馴服させた竺仏調は、常山の寺で住持をしておりましたが、常山には仏法を奉ずる兄弟がおつて、寺から百里あまり離れたところで暮らしていました。ところ

が兄のほうは妻が重い病にかかったので、治療上の便宜からお寺の近くに転住させていた。この兄は早くから仏調を師と仰ぎ、朝も昼も寺の中で過ごし、指導を受けて修行に励んでいた。ある日の朝、竺仏調が突然彼らの実家を訪れた。そこで弟は兄嫁の病状を詳しく尋ね、又、兄の消息を聞いた。すると仏調は、病人はほぼ善くなつてゐるし、そなたの兄もいつもと変わりなくやつてゐると話した。仏調が帰つていった後、弟も馬を走らせて兄のもとへと駆けつけたが、話がその朝尋ねてきた仏調の事に及ぶと、兄は驚いていった。和尚は朝から寺を出られたことは全然なかつたぞ。お前がお目にかかれるはずがない、と。兄弟は言い争ひ、ついに仏調に尋ねてみたところ、仏調は笑つて何も答えなかつた。二人ともどうにも腑に落ちなかつたという。(大正蔵五〇・二八七下)

また、耆域という僧は、洛陽が戦災に見舞われたのでこれを避けて天竺へ帰ることになつた時に、これを慕う人々五百人から別れに昼食に招かれ、耆域は皆参りましようと思つた。その翌朝、五百軒の家に皆耆域が一人ずつ現れたといひます。人々は始めは自分のところだけに耆域が立ち寄つてくれたのだと思つていたが、後で互いに問ひ合せてみると、彼の分身が尋ねてきたのだということがわかつたということでした。(大正蔵五〇・二八八中)

その他にも神異編には何人かの僧が、これに類した分身と

いうまことに希有な神異を現じたことを伝えていますが、この分身の思想というのも、仏の神通力の現れとして、經典に説かれているものであります。例えば法華經の宝塔品には釈迦如来が有縁の衆生を教化するために、方便神通力をもって、十方に分身することを説いておりますし、普門品に見られる觀音の応化というのも一種の分身と見られます。そして、その源流は仏の三身説に基づく仏の化身、仏の応化身の思想にあることが予想されるのであります。要はこうした分身の思想が、たとえ仏教の伝統思想に基づいて作られた神話であったとしても、当時の神靈の世界を信じる民衆はこれを經驗的な真実として受け止めていたというのが事実であり、しかもそれが民衆教化の一線において多大な力を發揮していたということなのであります。

(十)

この他、『高僧伝』に見られる神異現象は各種多方面に渡つていて、枚挙に暇がないほどであります。最後に神異を現じた僧たちの中の四割弱の者に見られたという、遷化の前後の神異現象を見てみたいと思ひます。これについても神異編と習禪編に限つて、その特徴的な事例を挙げてみようと思ひます。

神異の僧でもあり習禪者でもあつた、訶羅竭という人は、

元康元年、二九八年ですね、端坐したままで遷化したことで知られております。弟子が、インドのしきたりに従つて茶毘に付したところ、火を何日焚き続けても遺体は火の中で坐し続けたままで、いつまでたつても灰にならなかつたといひます。そこで弟子達は石窟の中に運んで帰ることにした。その後、西域の人で竺定という人が、晋の咸和年間、三二六年から三三四年に、その姿を見ようとその辺りに行ったところ、もうすでに、三十年以上も立っているというのに遺体はきちんと端坐したままになっていた。後に竺定は都に来て、人々にその話をして聞かせたということです。（大正蔵五〇・三八九上）

また、習禪者の帛僧光という人は、晋の太元の末、三九六年であります。衣を頭にかぶり端坐したまま遷化したのが、他の僧達は普段通り坐禅に入つたものと思つていた。しかし七日経つても出てこないで皆で行つてみると、顔色は通常の通りであつたが、ただ呼吸だけしていなかつたという。そこで、そのまま遺体を山中のお堂に移して葬つたが、遷化して長い時間が経つても、形骸は朽ちることがなかつたと伝えられております。

たまたま遷化して五十九年もたつた宋の孝建二年、四五五年に郭鴻という人が浙江省剡県に赴任した時に、山に入って僧光を礼拝したというのです。その時、試しに如意をもつて

胸を打ったところ、颯然として風が起り衣服がぼろぼろに飛び散って、白骨だけが現れたという。郭鴻は大いに恥恐れてこれを室に納め、瓦をもってその外を畳み、これに泥を塗ってその姿形を描いたという。慧皎はその画像が今も残っていると伝えております。(大正蔵五〇・三九五下)

このように遷化した後も、何らかの形で屍が朽ちることがなかったという神異現象は数多く見られますが、遷化に臨んで、あるいは茶毘に付したとき、五色の光明を發したり、馥郁たる芳香を放つなどの事例も多いのであります。

例えば習禪者の賢護という人は、臨終の時、口から五色の光明を出して、寺の中を明るく照らしたといいますが、遺言によって弟子達が茶毘に付したとき、身体の節々は全て焼き尽くしたのに、一本の指だけが燃えないで残った。そこでこの指を塔の下に埋めたといえます。(大正蔵五〇・三九六下)

又同じく習禪者の法緒という人は、盛夏に石室中において遷化したか、七日経つても死臭がなく、死体の左側に香りがあり、旬日にして、香りが消えたと思つたら、こんどは毎夕光りを放ち、数里先まで届くほどであったといえます。村人達はこれを奇特として屍の上に塔を造つて祀つたといわれています。(大正蔵五〇・三九六下・三九七上)

こうした事例は他にも多く、「神光屍に映じ、体更に香潔なり」(卷第十一「釈法期伝」、大正蔵五〇・三九九中)とか、茶

毘の時に「五色の煙の起るあり、殊香芬馥たり」(卷第十一「釈普恒伝」、大正蔵五〇・三九九下)と、簡潔に伝えているものもあります。

最後に、遷化の際の極めつけの神異現象として、死後の蘇生という事例があります。これはどういふことかと申しますと、例えば前述の分身のところでも触れた竺仏調は、自分の亡くなる日を予告した人で、信者を集めてこのことを告げると信者達は涙を流して、死期を伸ばされるように懇願したが、仏調は、生死は定まったものであり願つてどうなるものではないとして僧房に戻つて端坐し、衣で頭を覆つて、すらりと命果てたといえます。

その後数年経つて、彼の在家の弟子達八人が、西山に登つて木を伐つていたところ、ふと見ると仏調が高い岩の上に立っていた。衣服はさつぱりとしており、楽しそうな様子をしていました。みんなで驚喜して礼拝し、「和尚はまだご存命でございますましたか」と言うと、仏調は、「わしはいつでも存命じや」と答え、旧知の人たちの安否を詳しく尋ねた後しばらくしてから去つて行った。八人は大急ぎで、仕事を投げ出して家へ帰り、同法の者たちにこのことを話して聞かせたが、誰も確かめようがないので皆で墓を暴いて棺を開けてみると遺体は見当たらず、ただ衣類と履物が残っているだけであつたという。(大正蔵五〇・三八八上)

また、渉公という人は中央アジアの人であったが、夙に神異を現する僧として聞こえた人で、五穀を口にせず、一日に五百里歩く能力を持ち、未来のことを予言すると手のひらを指すようにぴたりと当たったというのです。渉公は苻堅の建元一二年、三七六年に長安にやって来たが、秘密の呪文によって龍を祈り下ろすことができたので、旱魃の度に苻堅は渉公に請うて龍を祈ってもらった。するとたちまち龍が鉢の中に下ってきたかと思うと、大雨が降って来た。苻堅をはじめ、群臣達は直々に鉢の中をのぞき込んでみて、皆その奇瑞に感嘆し、国神として崇め、官民が皆身を投げ出して渉公の足を押し戴いたという人があります。

この渉公は建元一六年、三八〇年に病むことなく遷化した。が、死後七日たって、国王の苻堅は、渉公が生前あまりに不思議な神異を現じた人だったので、棺を開いて調べてみると、遺体は見当たらずただ屍を包んだ布だけが残っていたという。（大正蔵五〇・二八九中〜下）

この蘇生といいますが、死後に棺を開いてみると遺体はどこにも見当たらず、竺仏調のように所を変えて生きていたという説話は、法華経の如来寿命品等に説かれる法身常住説にその起源を見ることができると思いますが（「方便現涅槃而実不滅度 常住此説法」、すでに中国に仏教が受容されたごく初期の段階において、例えば偉大な指導者であり、数々の

神異を現じて、後趙の石勒・石虎に信任された仏図澄にその先例を見ることができるのであります。

即ち仏図澄は東晋の穆帝の永和四年、三四八年に百七才で死んだといわれますが、石虎は国を挙げてその死を悼み、自ら造営した墓所に埋葬して棺のなかに仏図澄が生前に愛用した、錫杖と鉢を入れたといえます。のちに冉閔が国を奪い、石虎の一族は悉く滅ぼされましたが、胡族に対する憎しみに燃えた冉閔は、石勒・石虎をはじめ、かつての胡族の王達の墓という墓を暴き、その屍を引きずり出して捨てたということです。憎しみのあまり冉閔は、石勒や石虎が敬事した仏図澄の墓までも暴いたといわれます。部下達が恐る恐る仏図澄の遺骸をおさめたといわれる棺を開けてみると、ただ鉢と杖だけがあつて、遺体は見当たらなかったといえます。

一説では、仏図澄が死んだ月に胡族の旅人が、月明かりの砂漠で一人杖もなく飄々と歩いて行く仏図澄を見た、という噂がしばらくして都に伝わってきたことがあり、石虎はこれを疑って棺を開いてみると、やはり杖と鉢だけが残っていて死体は無かつたとも伝えられています。（大正蔵五〇・三八六下〜三八七上）

この仏図澄の遷化に際して現じた神異現象というのは、俗にこれを合理的に解釈しようとするならば、大神異者であり、大予言者でもあつた仏図澄が、後趙が滅び、政権が篡奪され

るであろうことを夙に予知していたであろうと思われ、事実、『高僧伝』には仏図澄が弟子の法祚を呼んで、「戊申の年に、また大きな災いがやってくる。そして、巳酉の年に石氏の朝廷は滅びるのである。しかし、私はその災いがやってくる前に死ぬことになった。そのことを石虎のもとにいつて、告げるように」(大正蔵五〇・三八六下)と言ったと伝えられています。従つて、もし政権が交代したときには、必ずや自分の墓も暴かれるであろうことを予知していた仏図澄は、あらかじめ弟子に遺言して、死後一早く遺体を別の場所に移させたということも考えられます。

しかし、これは神霊現象を信じない現代人の浅はかな推理に過ぎないのであつて、当時の民衆は、偉大なる神異の僧であつた仏図澄が遷化に際して、最後に現じた希有な神異現象としてこれを信じて疑わなかつたのであります。そして、この仏図澄の神異が先鞭となつて、伝統的な仏教の法身常住の思想等と結びついた結果、先に見たような高僧達の遷化における神異という希有な神話伝説の類が生みだされていったのではないかと思われるのであります。

(十一)

肝心なことはこのような神異現象がその後も長く中国の民衆に信じられ、中国における仏教の普及に対して大きな力と

なつていったということでもあります。そして、我々はそれ我々の祖師である達摩においても見る事ができるのであります。

それは周知のように、極めて伝統的な禅宗の史書である『景德伝灯録』の卷三の達摩の伝に載っている話であります。達摩は謎の多い人物で、未だに生没年代も定かではありませんが、一般に丙辰の年の一〇月五日に亡くなつたとされています。今日の一〇月五日が達摩忌になつてゐることは、周知の通りであります。その年の一月二八日に、熊耳山に葬られ、塔が定林寺に建てられたといわれております。三年経つた時に北魏の宋雲という僧が、勅命によつてインドに留学したのでありますが、中央アジアを回つて中国に帰国する途中、パミール高原で、手に片方の草履だけをぶら下げて飄々として一人歩いてくる達摩に出会つたと言うのであります。そこで宋雲は達摩にどこに行くのかと尋ねたところ、達摩はインドに帰るところだといつて、また宋雲に向かつて、あなたの国王はすでに崩御をされましたと告げたといふ。これを聞いて、宋雲は呆然として達摩と別れ、中国に帰つてきたが、果たして宋雲が命を受けてインドに行ったときの皇帝は亡くなつていて、帰朝後、宋雲はこのことを具に奏上したところ、時の皇帝は驚いて達摩の墓を開けさせてみると、棺の中は空っぽで、ただ片方の草履だけが残されていたといふ

のであります。朝野を挙げてこれが為に感嘆し、詔を奉じて、棺に残された片方の草履を取り上げ、これを少林寺に置いて懇ろに供養したというのであります。（大正蔵五一・二二〇中（下））

『景德伝灯録』の記事は、年号や皇帝の名前など相互に矛盾が多く、達摩の亡くなった年など確認できない点もありますが、宋雲が勅命を奉じてインドに留学したというのは史実で、その帰朝は東魏の、元象元年、五三八年ということになっております。これは梁の武帝の大同四年に当たり、その三年前に達摩が亡くなったとすると、それは東魏の天平二年、五三六年で、その年はまさに丙辰の年に当たっておりますので、この点では一致符号してあります。

この話は『景德伝灯録』の他にも、ご承知の通り『神会語録』『歴代法宝記』、『宝林伝』、『祖堂集』『伝法正宗記』等にも載っていて、当然のことながらこれが歴史的事実ではないにしても、このような伝統的な史書に例外なく取り上げられているということは、禪宗の始祖としての正統的な達摩像の確立とは別に、中国の民衆信仰のなかに定着した達摩像というものを無視することができなかつたからだと思つておられます。

それはまさに変幻自在な得道者として、中国人の崇敬する神仙的な人格であり、『高僧伝』の挙げる神異者の系譜に連

なるものであることをこの説話は暗示していると言えるのではないかと思つておられます。

このような達摩信仰に見られる、二重の構造というのは、そもそも中国に仏教が受容された当初から見られた傾向であつて、それは漢民族の支配下の中国に入った仏教が、支配者と被支配者のはっきりした上下支配関係の二重の社会機構に従つて二分された性格を持つていたからであります。その一つは貴族の間の般若教学を中心とした玄学的な仏教で、格義仏教に代表されるような、老莊という中国の伝統古典の思想知識を媒介として、中国人の知識層に布教された仏教であり、もう一つは疲弊した無知な大衆を超自然的な力で魅了するシヤーマニズム的な仏教か、或いは無病長寿を追求する神仙的道教的仏教であつたわけで、この両者共が仏教の正しい姿ではなかつたとしても、時勢の性格が自然に仏教に対するこうした需要を造つたと思つておられます。

その後の中国仏教の発展は、両者とも絶えず仏教の正しい姿を追求することにあつたとも言えますが、基本的にはこの二重の傾向というのは時代を経ても変わることがなかつたのではないかと思つておられます。『高僧伝』というのは、こうした初期の中国仏教受容の実態というものを極めて忠実に反映し記録した希有な歴史書であつて、そのキーポイントが高僧の六割に見られる神異という超常現象にあつたのではないかと思

われます。

慧皎が高徳の僧と寡徳の僧を峻別される際のキーワードとして神異ということが念頭にあったかどうか断定は出来ませんが、少なくとも、高徳の僧であったからこそ、生前に、或いは死後において信じ難いような靈験を現じたという神話や伝説が生まれるのであって、逆に言えば、民衆によってそのように信じられ崇められた僧こそが、紛れもなく隠れた有徳の高僧であると慧皎は判断したのではないかと思えます。

こうして改めて『高僧伝』を読み直してみますと、『高僧伝』というのは確かに今日でも第一級の史料価値を持つ史伝の書であることは間違いのないのでありますが、もう一つ、神異という超常現象に視点を置いてみますと、それは実に面白い読み物であり、超一級の優れた文芸の書であることに気が付くのであります。

ご承知かと思いますが、昭和四四年の文芸春秋の二月号に東京都知事の石原慎太郎さんの若い頃に書いた、『神異』という小説が載っています。是は『高僧伝』の神異編の、最初の巻のほぼ全体を占めている、仏図澄の伝記をですね、小説にアレンジしたもので、非常に面白いものでございます。作家の目から見ても『高僧伝』は一つの優れた読み物だ、ということがわかったからなのだろうと思うわけでありませう。是非皆さんも、『高僧伝』を単に史料の検索に使用するという

だけでなくて、一度この『高僧伝』全体を読み物として、読まれることをお勧めしたいと思います。

しかし、そうはいっても、一般の専門家・学者ではない人にとつては、国訳一切経もございませうけれども、あれは原文の書き下しでございまして、読み難いかと思えますが、それにつけてもアーサー・リンクさんがすでに三十年、四十年前にですね、『高僧伝』全一四巻を英訳されておったということにつけても、どなたか日本の学者でも、『高僧伝』の現代語訳というものをやってくれないかと思うのでございませう。そうすれば今よりもっと多くの人にこの希有の文芸の書である『高僧伝』というものが読まれるのではないかと思えます。私は百才まで生きればですね、後三十年ありますので、自分でやってもいいのですが、もう、命旦夕に迫っておりますので、とてもそんな気がございませぬ。せっかくアーサー・リンクさんの遺書があるので、どなたか後を継承して、現代訳という壮大な仕事を為して下さる方が出て欲しいと切に願っているものでございませぬ。最後にそのことを期待し、お願いいたしましたので、講義を終えさせていただきます。有難うございました。

【参考文献】(本講演にあたって左記の文献を参照しました)

- (1) 山内晋卿「高僧伝の研究」(『支那仏教史之研究』、仏教大学出版部、一九一八・一二)
- (2) 常磐大定「梁高僧伝解題」(『国訳一切経』「史伝部」七、大東出版社、一九三六・一〇)
- (3) 山崎宏「唐西明寺道宣律師考」(『福井博士頌寿記念東洋思想論集』、一九六〇・一一)
- (4) 村上嘉實「高僧伝の神異について」(『東方宗教』第十七号、一九六一・八)
- (5) 山崎宏「唐の道宣の感通について」(『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』、一九六一・八)
- (6) 石原慎太郎「神異」(『文芸春秋』二月号、一九六九・二)
- (7) 田中敬信「梁高僧伝における神異について」(『印度学仏教学研究』第二十卷第一号、一九七一・一二)
- (8) 田中敬信「道宣の神異―観仁寿造塔より―」(『印度学仏教学研究』第二十一卷第一号、一九七二・一二)
- (9) 大谷哲夫「魏晋代における習禪者の形態(二)―特に習禪者の神異と神遷家について―」(『印度学仏教学研究』第二十一卷第二号、一九七三・二二)
- (10) 吉岡義豊「中国民衆信仰の中の達摩大師」(『櫛田博士頌寿記念高僧伝の研究』、山喜房仏書林、一九七三・六)
- (11) 古田和弘「靈験二・高僧伝神異編」(『中国古典文学大系』第六十卷、平凡社、一九七五・二二)
- (12) 坂本廣博「梁高僧伝に見られる禪観―習禪編・神異編について―」(『天台学報』第二十三号、一九八〇)
- (13) 船本和則「梁・唐高僧伝における神異と狂と禪」(『PHILOSOPHIA』71、早稲田大学哲学会、一九八三)
- (14) 金岡照光「高僧伝」(『中国の古典』10、学習研究社、一九八三・九)
- (15) 中嶋隆蔵「高僧伝―仏陀とともに―」(講談社、一九八九・二)
- (16) 牧田諦亮「高僧伝の成立」(『中国仏教史研究』第三、大東出版社、一九八九・一〇)